

「低炭素社会づくり」長期ビジョンの検討について

平成 19 年 9 月 21 日
環境省地球環境局

1. 検討の趣旨について

(1) 「美しい星 50 (Cool Earth 50)」(抜粋)

…現在の技術の延長線上では、この「2050年半減」という目標は、達成困難です。したがって、その実現に向けて、「革新的技術の開発」とそれを中核とする「低炭素社会づくり」という長期のビジョンを示したいと思います。

…「低炭素社会づくり」については、生活の豊かさの実感と、二酸化炭素の排出削減が同時に達成できる社会の実現を目指します。具体的には、森林などの自然と共生した生活、公共交通等の効率的な移動システム、コンパクトなまちづくりなど、生活様式や社会システムの変革にまで踏み込んだ改革を打ち出していきます。我が国としては、「2050年半減」の長期目標とその実現手段について国際的な合意が得られるよう、各国に精力的に働きかけていきます。また、わが国の優れた技術力と伝統的な社会の仕組みなどを活用して、大いに貢献していきます。

特に、日本には、昔から「もったいない」の心があり、徹底したリサイクルが行われています。また、緑も豊かな江戸時代のまちづくりに代表される良き伝統があります。さらに、日本のGDP当たりの二酸化炭素排出量は世界の主要国の中で最も少なく、また、公共交通機関を使う割合は47%と先進国の中で抜きんでいます。こうしたわが国の伝統と優れた技術を活かし、環境と調和した美しい社会づくりを、「日本モデル」として世界に向けて発信していきます。

(2) 「低炭素社会づくり」長期ビジョンの考えられる要素

①基本的在り方

低炭素社会のあるべき方向を示す際にバックボーンとなる哲学を提示。

②低炭素社会像

上記を踏まえて、個別の分野・項目について低炭素社会のあるべき姿を提示。

2. 検討の進め方について

「低炭素社会づくり」長期ビジョンの検討を進めるに際しては、当面、来年7月の北海道洞爺湖サミットで日本が提唱すること、また、それに先立って我が国がサミット主催国としての抱負を述べる機会を念頭において、以下のようなスケジュールでお願いしたい。

(1) 有識者ヒアリング・自由討議 (9月～11月)

(2) 論点整理 (11月～12月)

(3) 論点整理を踏まえた更なる検討 (1月～3月)

3. 当面の開催予定

第1回 平成19年9月21日(金) 10:00-12:00

場所: 第1会議室

発表者:

松井孝典 東京大学大学院理学系研究科・新領域創生科学科教授
坂村健 東京大学教授、ユビキタス・ネットワーキング研究所所長

第2回 平成19年10月3日(水) 13:30-16:30

場所: 航空会館703号室

発表者:

尾島俊雄 早稲田大学理工学部建築学科教授
原田泰 株式会社大和総研チーフエコノミスト
藺田綾子 株式会社クレアン代表取締役

第3回 平成19年10月11日(木) 9:30-12:30

場所: 調整中

発表者:

川勝平太 静岡文化芸術大学学長
寺島実郎 株式会社三井物産戦略研究所所長、財団法人日本総合研究所会長
伊藤隆敏 東京大学大学院経済学研究科教授

第4回 平成19年10月15日(月) 午後(調整中)

場所: 調整中

発表者:

内藤正久 財団法人日本エネルギー経済研究所理事長
大塚啓二郎 政策研究大学院大学教授

第5回 平成19年10月24日(水) 9:30-12:30

場所: 調整中

発表者:

渡邊浩之 トヨタ自動車株式会社技監
林良博 東京大学大学院農学生命科学研究科教授
安田喜憲 国際日本文化研究センター教授

首相官邸

安倍総理の演説・記者会見等

トップページ ▲

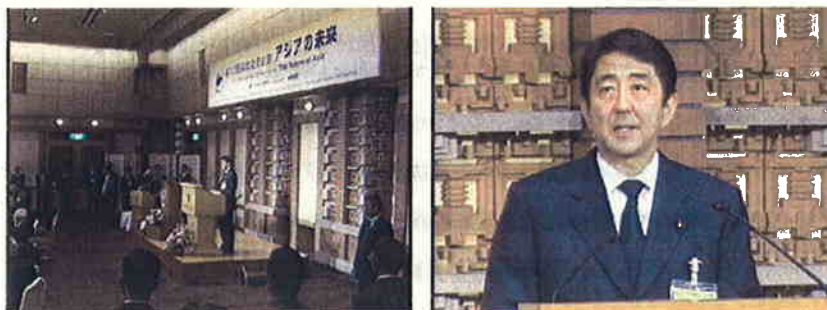
トップ> 安倍総理の演説・記者会見等

地球温暖化対策に関する内閣総理大臣演説

美しい星へのいざない「Invitation to 『Cool Earth 50』」
～ 3つの提案、3つの原則 ～

国際交流会議「アジアの未来」晩餐会にて

平成19年5月24日



参考資料(PDF形式)

概要(図)/概要(サマリー)
 付属資料1: 革新的技術開発
 付属資料2: 低炭素社会
 付属資料3: 国民運動
 付属資料4: 主要外交日程

本日、各方面でアジアを代表する皆様方の前で、スピーチをする機会をいただいたことを誠にうれしく思います。本日の会合の関係者の皆様に感謝申し上げます。

未来に責任を有する政治家として、私は、地球環境問題、とりわけ、気候変動問題に大きな関心を持っています。

アジアは世界の成長の中心であり、アジアでこの問題への対応を怠った場合には、世界全体の未来に大きな悪影響が出てくるおそれがあります。

1月の東アジアサミットでは、アロヨ大統領の卓越した指導力により、この問題の一翼を担うエネルギー安全保障について合意することができました。改めて、アロヨ大統領に敬意を表します。その後、4月の中国・温家宝首相、米国・ブッシュ大統領との会談においても、気候変動問題の解決に向けた協力を強化することで一致しました。

こうした経緯を踏まえ、本日、この問題に対する私の考え方と提案を、皆様方に申し述べたいと思います。そして、アジアの皆様と共有した決意を、私は世界全体に訴えてまいります。

【問題提起】

地球と人類の歴史を顧みれば、世界中に眠る石炭や石油などの化石資源は、地球上の生物が、何千万年、何億年という長い年月をかけて、大気中の二酸化炭素を少しずつ固定化しながら蓄積してきたものです。しかし我々人類は、産業革命に突入してからわずか200年あまりで、その貴重な遺産を急速に燃やし尽くし、大気中に膨大な量の二酸化炭素を放出しつつあるのです。

気候変動に関する政府間パネル(IPCC)の報告では、地球温暖化は疑う余地がないとされています。地球温暖化が進行すると、大洪水や干ばつなどの異常気象の頻度が高まり、また、感染症による健康被害が増加することが懸念されています。さらに、水資源の枯渇により食糧生産が危機的状況に陥るおそれがあります。

今こそ、我々は行動しなければなりません。そうでなければ、将来の子孫に対し、どんな顔向けられるでしょうか。

一方で我々は、この問題に精力的に取り組んできました。京都議定書は、人類が温室効果ガス削減という、具体的な温暖化対策に踏み出した第一歩でありました。ただ、そこには限界があることも認めざるを得ません。このため、京都議定書を超えて、世界全体が参加する排出削減のための新たな枠組みを作ることが必要です。

現在、この試みに対しては、大きく3つの懸念が示されています。しかし、私はこれらの懸念は克服可能だと考えています。

第1の懸念は、「温室効果ガスの排出削減に取り組むと、経済成長が阻害されるのではないか」ということです。私は、技術の開発や社会生活の改革に、人類の叡智を結集することにより、排出削減を進めながら経済成長を維持することが可能であると考えます。特に、優れた技術を有する我が国は、その両立に大いに貢献することができます。